

教師を目指す大学1年生対象の「小学校英語」 —英語学領域からのアプローチ—

犬塚 博彦

1. はじめに

岩手大学教育学部では、2019年度から、再課程認定を反映した新たなカリキュラムがスタートした。小学校における英語の教科化を視野に入れた科目としては、それ以前の旧カリキュラムにおいては「小学校の英語教育」という科目があったが、これは教科教育と教科専門の両側面を1科目に凝縮した形で2年生を対象に後期に展開されていた。2019年度から始まった新カリキュラムではこれが拡充され、教科教育の面からは「英語科教育法(小)」(2年次後期)、教科専門の面からは「小学校英語」(1年次後期)としてそれぞれ独立した科目となった。これらは小学校教育コースではいずれも必修科目として位置づけられることになった。

このうち「小学校英語」については、実施体制としては、全14回の授業のうち、英語学・英語圏文学・英語教育のそれぞれの領域を本学の専任教員3名でオムニバス形式で4回もしくは5回担当することになり、筆者は英語学領域を担当した。なお「小学校英語」は、必修科目となる小学校教育コースの学生に加えて、選択科目として他コース(中学校教育コース・理数教育コース・特別支援教育コース)の学生も履修できるので、2019年度後期の履修者は全部で108名であった。

ところで、新カリキュラムでは「小学校英語」の開講時期が1年次後期の設定になったことにより、授業担当者にとっては新たな課題に直面することになった。すなわち、1年次後期の時点では、学生たちは全学共通の教養教育科目の履修が中心であって、教育学部の専門科目の履修はごく一部でしか始まっていない。たとえば英語学関連の科目で言うと、「小学校教育コース」では1年次後期に「英語音声学講義」があるのみであって、英語学領域の主たる専門科目(「英語の文法」「英語学の世界」など)の履修は2年次になってから始まる。教科教育の領域でも同様に「英語科教育法」が2年次前期から始まるため、学生たちが「小学校英語」を履修する時点ではこれもまた未知の領域ということになる。このような状況の学生たちを対象として「小学校英語」を担当するにあたって、授業でどのようなトピックを取りあげ、それをどう展開していくかという課題に直面することになったのである。

2. 英語学領域における授業展開の構想

2. 1 ——素材は易しく、内容は深く——

「小学校英語」は教育学部「小学校教育コース」では必修科目となっているということもあって、履修者は、英語サブコース以外のサブコースに所属する学生がその大半を占めることになる。そのため、講義を担当する者としては、英語に関する専門科目を必ずしも体系的に学ぶことは想定していない学生たちが多数履修することを念頭におかなくてはならない。しかも、授業担当の回数はわずか5回である。そのため、講義をするにあたっては、必然的に、「何を取りあげ、何を取りあげないか」の取捨選択を迫られることになる。

「小学校英語」というと、学生たちが将来、小学校の教員になった時に、子どもたちを前にして授業でそのまますぐに使えるような実践的な内容を教えるというイメージが一般的にはあるかもしれない。しかし、本学では「小学校英語」の開講時期が1年次後期であるという点と、1年次後期では「英語科教育法(小)」

(小学校に特化した英語科教育法)もまだ履修していない段階であるという点を考慮に入れた時、将来、教職に就いたときに困らないような授業実践力を養成する内容を取り扱うのは時期的にもまだ早いように思われる。その前にしておくべきことがあるはずである。それはすなわち、学生たちは1年次の段階では、英語そのものに関する知識をできるだけ広く身につけ、そして深く学ぶことが重要なのである。

「小学校英語」は、教科教育ではなく教科専門の科目であるので、講義では、その導入部分では小学生でも理解できるような易しい素材を使いつつも、また同時に学問的にも奥深く追究していけるような内容を含んでいることがベストであると筆者は考える。そこで筆者は「——素材は易しく、内容は深く——」を講義の中心的な理念に据えることにした。

人はとかく、すぐに役に立つとか、立たないとか、そういう観点からものごとを捉えがちであるが、大学での学問というのはそういうものではない。仮に、「小学校英語」で展開される授業内容のうち、将来、手を加えずにそのままの形で小学校の授業で使える部分が仮に1パーセントに過ぎないとしても、残りの99パーセントを占めるしっかりとした背景知識を持っていればこそ、学生たちは将来の職場で自信をもって授業を行うことができるのである。教科専門の存在意義はまさにここにある。

2. 2 授業構想における留意点

筆者が授業構想を立てる上で留意した点は以下のとおりである。

(1) 講義は、高校までの学習内容を踏まえたうえで、大学1年次の後期の時点で学生たちにとって既知と思われるところから話を起こし、講義にしっかり耳を傾けていれば、難なくその理解が深まっていくように段階的にトピックを順序づけること。その際、現時点で確実に理解できと思われる内容を含むことはもちろんのこと、それに加えて、その時は難しく感じるかもしれないがその先にある発展的な内容をも同時に示すことにより、大学で学ぶそれぞれの学問の奥深さに気づいてもらうこと。

(2) 学生たちにとって驚きや新たな発見につながり、さらなる知的好奇心を引き出せるような内容にするため、教材は視覚的に直観でわかるような言語資料を使うこと。

なお、教材は、空欄補充の書き込み形式の手づくり資料を使用することとした。書き込み形式の教材にした理由は以下のとおりである。すなわち、学生たちは、小中高を通じて空欄補充形式のドリルに慣れてきている。そのため、授業で配布された資料の所々に[]のような空欄を見つけると、そこに文字や数字を何か書き込んでそれを完成させたいという心理がはたらくものと思われる。それにより、講義に注意深く耳を傾けるという効果が期待できるのである。逆に、はじめから完成版の資料を渡してしまうと、学生によっては、もうそれですっかり安心してしまい、資料を眺めるだけで勉強したつもりになってしまうこともあり得るため、かえって教師の話に耳を傾けなくなってしまうことが懸念されるのである。

3. 講義テーマ

筆者が設定した各回の講義テーマは以下のとおりである。ここでは、実際の授業で取り扱った内容が端的にわかるように、各回の講義テーマ（カッコ書き）の右側に主要トピックの一例を添えて示すことにする。

◆◆◆ 《「小学校英語」：英語学領域における講義テーマ（全5回）》 ◆◆◆

第1回：「英語という言語について」： インド・ヨーロッパ語族の中の一つとしての英語

- 第2回：「アルファベットの歴史」： 人類の英知——フェニキア文字からギリシア文字、そしてエトルリア文字を経てラテン文字へ
- 第3回：「英語の音声」： 英語の強勢とイントネーション
- 第4回：「英語の文法①」： 英語的発想のしくみ——名詞と冠詞を中心に
- 第5回：「英語の文法②」： 丁寧表現——高校英語の一步先へ



以下、次章では、筆者が掲げた「——素材は易しく、しかも内容は深く——」という理念のもとに、講義でどのようなトピックを取りあげ、どのように授業展開をしたかについて、令和元年10月3日(木)に実施した第1回講義「英語という言語について」を例にして詳述することにしたい。

4. 授業構想から実践へ

筆者の第1回講義「英語という言語について」(令和元年10月3日(木)実施)では、3つのトピック、すなわち、「世界の中の英語」、「インド・ヨーロッパ語族の中の一つとしての英語」、および「英語の語彙」を取りあげた。このうち本章では、「インド・ヨーロッパ語族の中の一つとしての英語」および「英語の語彙」の2つのトピックにおいて、どのように授業実践をしたかについて詳述することにした。

4. 1 インド・ヨーロッパ語族の中の一つとしての英語——数詞「1～10」

4. 1. 1 その背景

「インド・ヨーロッパ語族の中の一つとしての英語」では、数詞「1～10」を話の中心に据えることにした。英語の数詞「1～10」は、小学校の英語教育においてはまさに基本中の基本となる素材である。同時にまた、初修外国語(第二外国語)でドイツ語またはフランス語を履修している大学1年生の場合、あるいはそれ以外の言語を履修している学生であったとしても、インド・ヨーロッパ語族に属する諸言語の数詞一覧は、直観でもって英語との関係性に気づきやすいという点からも格好の素材なのである。

4. 1. 2 言語当てクイズ

学生たちに、何らかの形で英語との間の関係性に資料データから直観で気づかせるために比較の対象とする言語として、筆者は、ゲルマン語派からは「オランダ語」「ドイツ語」、イタリック語派からは「フランス語」、「スペイン語」、

「ポルトガル語」、「イタリア語」そして「ラテン語」を取りあげることにした。授業ではそれを「言語当てクイズ」として位置づけて、言語名のところを [] で空欄にした形での数詞「1～10」一覧を教材として配布した。以下はその抜粋である。但し、本稿では解答つきの資料を提示する。

《授業配布資料からの抜粋①》（【註】授業配布時は網掛け部分は空欄の状態）

【インド・ヨーロッパ】語族の中の一つとしての英語

【問】数詞1～10。何語か。

	英語	オランダ語	ドイツ語	フランス語	スペイン語	ポルトガル語	イタリア語	ラテン語
1	one	een	eins	un	uno	um	uno	ūnus
2	two	twee	zwei	deux	dos	dois	due	duo
3	three	drie	drei	trois	tres	três	tre	trēs
4	four	vier	vier	quatre	cuatro	quatro	quattro	quattor
5	five	vijf	fünf	cinq	cinco	cinco	cinq	quīnque
6	six	zes	sechs	six	seis	seis	sei	sex
7	seven	zeven	sieben	sept	siete	sete	sette	septem
8	eight	acht	acht	huit	ocho	oito	otto	octō
9	nine	negen	neun	neuf	nueve	nove	nove	novem
10	ten	tien	zehn	dix	diez	dez	dieci	decem

4. 1. 3 直観による2つの区分——語派という概念

講義では、最初に、学生たちに、「発音のことは抜きにして、上記8つの言語のスペリングに着目して、もしこれを2つのグループに分けるとすると、どこに境界線が引けるか」という問いを発し、その分かれ目のところに縦に仕切りの線を引くように指示をした。ほぼすべての学生が、上記の言語一覧の中で、左3つと右5つの間に仕切りの線を引いた。

学生たちへの次の指示として、わかる範囲でよいので何語だと思ふかを空欄に記入してもらった。

筆者から正解を伝えた上で（つまり、左から順に、英語・オランダ語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ラテン語）、学生たちには別資料として、インド・ヨーロッパ語族の系統図を配布した。

学生たちには、枝分かれ系統図の中に上記8つの言語名を見つけてもらい、そ

れを丸印で囲んでもらった。あわせて、枝分かれの途中に書かれてある「ゲルマン語派」「イタリック語派」という名称のところも丸印で囲んでもらった。

すると、学生たちは、先ほど数詞「1～10」の一覧表を見て「何となく似ている」という直観をもとに2分した言語グループが、ゲルマン語派（英語・オランダ語・ドイツ語）とイタリック語派（フランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語・ラテン語）であることに気づくことになる。そしてそれらは互いに「根っこのところでつながっている」ということが系統図で視覚的に確認でき、さらに大もとに、インド＝ヨーロッパ祖語(Proto-Indo European)があるという予備知識を得たことになる。総論としてはここまでで十分である。

4. 1. 4 発音をめぐる話題

4. 1. 4. 1 それぞれの言語がもつ不思議な音色

次に、学生たちにはそれぞれの言語での数詞「1～10」の音声サンプルを聞いてもらった。学生たちへの発問としては、そもそも、それぞれの言語の音声は「それらしく」聞こえるのはなぜなのか、つまり、英語の音声が耳に飛び込んでくれば、たとえ内容が全く理解できなくても少なくともそれが英語だということはわかるし、フランス語を聞けばフランス語らしい響きを感じ取るし、ドイツ語はまたドイツ語らしく聞こえてくる。そのわけはどこにあるのか、という問いを発した。

筆者からは、そのいくつかの要因の例として、それぞれの言語の母語話者が音声（子音・母音）を発音する際の調音上の特徴や、それぞれの言語がもつ音連続の型、アクセント、イントネーションなどが複雑に関わりあって、言語ごとに異なる不思議な音色、つまり「それらしさ」、を醸し出していることを伝えた。

これに関連して一言つけ加えておくと、英語に加えて別の言語を学ぶ場合、その言語に関する辞書や参考書の中に、たとえ英語にあるものと同じ音声記号を見つけたとしても、必ずしもその両者が全く同じ音声であるとは限らないことに注意すべきである。つまり、個別言語の辞書や参考書に見られる音声記号は簡略表記であることが多いため、音声を当該言語の枠の中だけで大雑把にとらえるときには簡潔でわかりやすいのであるが、複数の言語を視野に入れる場合には、厳密に言えば、IPAによる精密表記によらなければならない。

4. 1. 4. 2 英語の/θ/音について：数詞リストの「3」three から

その一例として、ここで発展的な内容になるが、数詞「1～10」のうち、英語 three の語頭にある/θ/音について触れておきたい。外国語として学習している言語が英語のみである場合はなかなか気づきにくいのであるが、/θ/音を音素として含む言語はむしろ少数派である。参考までに、亀井孝他編(1998)『言語学大辞典セクション：ヨーロッパの言語』に収録されているヨーロッパ諸言語のうち、/θ/が音論の子音リストに記載されている言語を調べてみたところ、数多くのヨーロッパの言語の中では、英語のほかは、(スペインの)スペイン語、現代ギリシャ語、アイルランド語、アルバニア語、ガリシア語、ウェールズ語などほんのわずかな数の言語しかないことがわかった。

ここでは興味深い比較として、/θ/音を音素として含む上記の言語のうち、英語と(スペインの)スペイン語に見られる/θ/音の調音上の微妙な差異について触れておきたい。例えば次の例を見てみよう。

英語 think [θɪŋk] 「考える」
 スペイン語 cinco [θiŋko] 「(数詞の)5」

いずれの語にも/θ/音が含まれているのであるが、このうち、英語の/θ/音は無声歯摩擦音(dental fricative)であり、舌尖を上歯の裏に軽くあてて調音される摩擦音である。なお、英語の/θ/音は「舌尖を上下の歯の間から少し出して発音する人もいる」(竹林 1996: 200)ことから、その場合は歯間音(interdental)としての位置づけとなる。

一方、スペイン語の/θ/音は、英語の/θ/よりも調音位置がもっと前よりでしかも摩擦が強い(竹林 1996: 39)。山田他 (1995: 14)によると、(スペインの)スペイン語では、「上下門歯間に軽く舌尖をはさんで、その隙間から摩擦を伴った息を出して発音」される無声摩擦歯間音である。そのため、スペイン語の/θ/音はIPAによる精密表記では、[θ]に調音位置が前寄り歯間音であることを明示するための補助記号，を[θ]の下に添えて表示されることがある(竹林 1996: 40)。

4. 1. 4. 3 数詞「6」—スペリングが同じでも言語によって発音が異なる

複数の言語を視野に入れた時、スペリングが同じであっても言語ごとに発音が異なるという例に出くわすことがある。数詞「1～10」リストの中の例として

は、数詞「6」は、英語とフランス語ではいずれも six であり、スペイン語とポルトガル語ではいずれも seis で同形である。

— 《six》 —			— 《seis》 —		
英語	six	[sɪks]	スペイン語	seis	[seis]
フランス語	six	[sis]	ポルトガル語	seis	[sejʃ]

このうち、スペイン語とポルトガル語の場合、数詞「6」 seis の発音は、スペイン語ではそのままローマ字読みで[seis]であるのに対し、(ポルトガルの)ポルトガル語では[sejʃ]となる。これは授業では実際の音声聞いて確認してもらった。なお、ポルトガル語音声の精密表記は彌永(2005: 29)による。

4. 1. 5 数詞「1」と不定冠詞の関係一言語の史的変化の観点から

本項では、数詞「1」をめぐる話題について取りあげることにしよう。前掲の数詞リスト「1」の語形を見て、本学の初修外国語（第二外国語）でドイツ語かフランス語を選択している学生のうち、勘のいい学生であれば、ドイツ語の数詞「1」 eins から不定冠詞 ein / eine / ein を連想するであろうし、フランス語の数詞「1」 un からは不定冠詞 un / une を想起するであろう。本学の初修外国語（第二外国語）には含まれてはいないが、スペイン語・ポルトガル語・イタリア語の場合でも、もし数詞「1」とそれぞれの言語の不定冠詞を同時に並べて示されれば、たとえその言語を学んだことがない学生であっても、数詞と不定冠詞の間に何らかの関係があるのではないかと思うことは想像に難くない。以下、各国語で数詞「1」と不定冠詞を一覧の形で示すことにする。

英語	オランダ語	ドイツ語	フランス語	スペイン語	ポルトガル語	イタリア語	ラテン語
《数詞「1」》							
one	een	eins	un	uno	um	uno	ūnus /
			(une)	(una)	(uma)	(una)	ūna /
							ūnum

《不定冠詞》							
a	een	ein /	un	un	um	un	——
		eine /	une	una	uma	una	——
		ein					

少し解説を加えておこう。まず、不定冠詞についてである。上記の言語のうち、英語以外の言語では名詞に文法上の性(gender)があるため、名詞に先行する不定冠詞にもそれぞれに対応する語形があらかじめ決まっている。このうち、上記リストの言語順に左から見ていくと、現代オランダ語は通性と中性の2つがあり、不定冠詞はいずれも *een* であって同形である(桜井 1986: 48-49)。ドイツ語には男性・女性・中性の3つ、フランス語・スペイン語・ポルトガル語・イタリア語には男性・女性の2つの区別があり、それぞれに対応する不定冠詞の語形が決まっている。このうちイタリア語は不定冠詞の後にくる語の語頭音によって男性形は *un~uno*、女性形は *una~un'* と語形が変わるが(坂本 2009: 33-35)、上記リストはそのうちの基本形のみを示している。なお、ラテン語には不定冠詞そのものが存在していなかった。

次にラテン語の数詞「1」について触れておこう。ラテン語の名詞類には曲用があるため、主格・対格・属格・与格・奪格でそれぞれ固有の語形がある。それに加えて数詞「1」は「代名詞型形容詞」(中山 2007: 182)であって、男性形・女性形・中性形でまた語形が変わる。上記リストでは煩雑さを避けるため、ラテン語の数詞「1」については、男性形・女性形・中性形のそれぞれ主格形のみを順に *ūnus / ūna / ūnum* 表記したことをお断りしておく。

ここで、ラテン語の数詞「1」と現代ロマンス諸語の不定冠詞の関係性について触れておく。簡潔に言うと、古典ラテン語の時代には、特に「一つ」であることを強調するために使われていた数詞「1」を表す *ūnus / ūna / ūnum* がその後のロマンス諸語に至る史的变化の過程で弱化して、ラテン語にもともとなかった不定冠詞がロマンス諸語で形成されることになったのである(小林 2019: 283)。

不定冠詞が数詞「1」から史的变化の過程で生じたという事実は、イタリック語派の言語に限らず、ゲルマン語派の諸言語にも同種の現象が見られた。ヘンチェル&ヴァイト (1994: 209)によると、「ゲルマン諸語においては、冠詞は比較的新しく生まれた。ゴート語には萌芽が見られるだけで、古高ドイツ語時代になってはじめて指示代名詞から定冠詞が、数詞 *ein* から不定冠詞がそれぞれ形成された」のである。

ところで、上記ヘンチェル&ヴァイトの言にあるように、ドイツ語史において数詞「1」から不定冠詞が形成されたという事実は、ドイツ語と同じゲルマン語

派に属する英語の史的変遷においてもまさにそのままあてはまる。下宮他編(1989: 3)によると、英語の不定冠詞 a は「古英語の *an* 「1」の弱形」で「12世紀頃から子音の前で a、母音の前で *an* の形が用いられ始めた。…(中略)…強形 *an* は *one* として発達した」とある。また、寺澤(1997: 1)には、古英語の *an* 「1」が「次の語が子音で始まる際には 1200 年ごろから尾音消失により a となる」とある。つまり、現代英語の不定冠詞 a / an のうち、英語の史的変化という観点からは、先にあったのは *an* のほうであって、あとからできたのが a である。

小学校・中学校で学ぶ初学者向けの英語教育の場面では、子どもたちへの不定冠詞 a / an の説明のしかたとしては、「ひとつふたつと数えられるものの名前の前には a をつける。ただし、アイウエオの音で始まる単語の前では *an* にする」というこれまでどおりの教え方でよい。つまり、小・中学生に英語の史的変遷の話題にまで言及することは、混乱のもととなるので避けたほうがよい。しかし、英語教師を目ざす大学生はひととおりに知っておくとよい項目の一つなのである。

4. 1. 6 月の名称とラテン語の数詞

ではまた数詞の一覧表のところに話を戻そう。勘のいい学生であれば、ラテン語の数詞を 1 から順に 10 まで眺めたとき、7 以降、「7」(*septem*)、「8」(*octō*)、「9」(*novem*)、「10」(*decem*)とくれば、英語の *September*、*October*、*November*、*December* を連想するに違いない。でも次の瞬間、数字が合わないということに気づくはずである。つまり「9月」(*September*)のはずなのにラテン語ではなぜ「7」(*septem*)なのか、10月・11月・12月を含めラテン語の数字と実際の月の名称が2カ月ずれているのはなぜかという疑問を抱くことが想定される。そこで講義では、古代ローマの暦の話へとつながっていく。

これについて筆者は、授業ではごく簡潔に、「古代ローマの暦はいまの3月から始まったのです。3月から数えて7番目なので「7」(*septem*)の月ということで *September* と言うのです」と説明することになっている。学生たちはそこから類推して、3月から数えて8番目だから「8」(*octō*)の月で *October*、9番目だから「9」(*novem*)の月ということで *November*、そして10番目だから「10」(*decem*)の月ということで *December* という考えに容易にたどりつくのである。そして、こちらからは、「そう言えば英語の *decade* は10年間という意味でしたよね」と畳みかけ、受験勉強時代に覚えたはずの英単語と結びつけると、学生たちは妙に納得するのである。

ここで、ラテン語の数字と実際の月の名称が2カ月ずれていることについて、大西 (1997: 92-93)、逸身 (2000: 199-200)、風間 (1998: 74)、風間 (2005: 80) をもとにまとめておきたい。上記文献によると、古代ローマの暦では、一年の最初の月は現在の三月(Martius)から始まり、当初は十カ月の暦が用いられた。当初は現在の一月・二月にあたる月については、特に名称はなかったが、後に Jānuārius、Februārius のいう名称が充てられるようになった。その後、BC153 年以降は一月を起点に改められ、それにより、2カ月のずれが生じるようになった。大西 (1997: 92-93)、逸身 (2000: 199-200)、風間 (1998: 74)、風間 (2005: 80) の内容を総合すると、その間の経緯は以下のように示される。

(当初は三月を起点として)⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒(BC153 年以降は一月が起点になる)	
1 番目の月	Martius 「戦の神 Mars の」 →→→→→→→→三月 (英: March)
2 番目の月	Aprīlis (語源不詳) →→→→→→→→→→四月 (英: April)
3 番目の月	Māius 「女神 Māia の」 →→→→→→→→→→五月 (英: May)
4 番目の月	Jūnius 「女神 Jūnō の」 →→→→→→→→→→六月 (英: June)
5 番目の月	Quīntilis 「5 (quīnque)の」、後に Jūlius→→七月 (英: July)
6 番目の月	Sextilis 「6 (sex)の」、後に Augustus →→→→八月 (英: August)
7 番目の月	September 「7 (septem)の」 →→→→→→→→九月 (英: September)
8 番目の月	October 「8 (octo)の」 →→→→→→→→→→十月 (英: October)
9 番目の月	November 「9 (novem)の」 →→→→→→→→→十一月 (英: November)
10 番目の月	December 「10 (decem)の」 →→→→→→→→十二月 (英: December)
↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	
(後に残りの二カ月分の名称追加) (BC153 年以降は一月を起点に変更)	
	*Jānuārius 「Jānus の」 →→→→→→→→→→一月 (英: January)
	*Februārius 「清めの供物 februa の」 →→→→→二月 (英: February)

ここで少し補足をしておくと、古代ローマの暦で「5 番目の月」は当初は数詞「5 (quīnque)」を反映した Quīntilis であったのだが、後に Jūlius に改められ、それが英語の July につながっていく。同様に、「6 番目の月」は当初は数詞「6 (sex)」を反映した Sextilis であったのだが、後に Augustus に改められ、それが英語の August につながっていく。なお、月の名称は、ラテン語では本来は形容詞であったことを付記しておく。

4. 2 英語の語彙——ゲルマン系かロマンス系（ラテン系）か——

本節では、筆者による「小学校英語」の第1回の講義「英語という言語について」（令和元年10月3日（木）実施）で取りあげたトピックの中で「英語の語彙」について、どのように授業実践をしたかについて詳述することにした。

4. 2. 1 英語の語彙におけるラテン語とフランス語からの影響

英語は現在に至るまでの史変遷の過程で、とりわけその語彙の面でラテン語とフランス語から受けた影響は極めて大きい。英語の語彙に占めるその割合としては、安井（1987:116）によると、「英語の語彙をゲルマン系、ロマンス系、および、その他の三つに分けると、それらの百分率は35:55:10である」とあり、また下宮他編（1989:637）には、「英語の語彙全体の50パーセントはラテン系（フランス語を含む）、10パーセントはギリシア語」という割合が示されている。これらの文献に載っている数字はいずれも概数ではあるのだが、少なくとも英語の語彙の約半数はラテン語とフランス語からの影響を受けているとすることができる。

4. 2. 2 ゲルマン系かロマンス系かの識別クイズ

そこで筆者は、英語の語彙の中に占めるラテン語およびフランス語の影響を学生たちにじかに体感してもらうため、授業では一つの文を切り口にして、「ゲルマン系かロマンス系かの識別クイズ」を導入部分で行ってから話を進めることにした。識別クイズで使用したのは以下の文例である。

【問】：下記の英文のうち、ロマンス系と思われる語を□で囲んで下さい。

(英) It is impossible to read this book in three days.

cf.(仏) Il est impossible de lire ce livre en trois jours.

「この本を3日で読むことは不可能だ」

なお、この識別クイズの文例のうち、フランス文は土居（1970:101）から使用させていただき、それに対応する英文を添えて授業用にアレンジしたものである。

たとえフランス語を学んでいない学生であっても、英語の impossible と全く同じスペリングの語がフランス文の中に含まれていることは一目瞭然であり、かつ、

「英語の語彙の約半数がロマンス系である」という話を組み合わせて考えれば、識別クイズの正解は英文の中の impossible であることはおのずから明らかとなる。そして上記の文例では、impossible 以外の語は英語とフランス語で語形が異なることにも容易に気づくであろう。筆者の講義はまさにこの部分を出発点として多方向に展開していくのである。

4. 2. 3 非人称構文 (impersonal construction)

筆者が識別クイズで提示した文は、英語とフランス語いずれも非人称構文 (impersonal construction) であって、英語では It is 形容詞 to 不定詞 〃の形を取り、一方のフランス語では Il est 形容詞 de 不定詞 〃の形をとる (朝倉 2002 : 206)。ここで、非人称構文のフランス文例を少し追加してその上で話を進めていくことにしたい。

- (1) It is impossible to read this book in three days.
- (2-a) Il est impossible de lire ce livre en trois jours. (土居 1970 : 101)
「この本を3日で読むことは不可能だ」
- (2-b) Il est nécessaire d'apprendre le français. (朝倉 2002 : 206)
「フランス語を習うことは必要です」
- (2-c) Il est difficile de vendre ce livre. (新倉他 1996 : 213)
「本を売るのは難しい」

4. 2. 4 “impossible” 考 [(1) vs.(2-a)]

英語 impossible 「不可能な」は語源的には古フランス語で同形の impossible に遡る。ここで話をわかりやすくするために接頭辞 im (<in) を語幹から切り離して possible 部分のみに着目する。古フランス語の possible はさらに語源をさかのぼると、ラテン語の形容詞 possibilis 「(存在・実行)可能な」にたどり着く。

ところで、英語 impossible の類語として unable という語が英語にあることを学生たちはみな知っている。ではここで英語の unable の語形成のしくみを見てみよう。英語の unable は、打消しの意味をもつ un- に able 「できる」が続いたものである。ところで、un- は英語本来語としての接頭辞、つまりゲルマン系の接頭辞であるのに対し、able のほうはラテン系の接尾語である。このことから、英語の unable はゲルマン系とラテン系 (ロマンス系) の異種の要素が1語の中に組み込まれた「混種語」ということになる (下宮他編 1989 : 614-615)。ちなみにこの able の語源はラテン語の形容詞 habilis 「扱いやすい、便利な」に遡り、

ラテン語の動詞 *habeō* 「持つ」(不定法の語形は *habere*)とも関連がある。

混種語の他の例として *beautiful* について触れておこう。*beautiful* は *beauti-* と *-ful* に分解できる。このうち、*beauti-* はフランス語の *beauté* 「美しさ」に由来し、*-ful* は英語の *full* が接尾辞化したものである(下宮他編 1989:614-615)。こういう意味で *unable* や *beautiful* など英語学習の初期段階で学ぶ語を、混種語という言語学的な観点であらためて捉え直してみると、大学1年生にとってはまさに目から鱗の新発見がそこにあるのである。

4. 2. 5 “is” 考 [(1), (2-a), (2-b), (2-c)]

大学1年生は英語以外の外国語の学習を始めているので、たとえそれがフランス語でなくても、4.2.3.でみた非人称構文、すなわち *It is* 形容詞 *to* 不定詞 *～*. と *Il est* 形容詞 *de* 不定詞 *～*. を見比べれば、英語の *is* はフランス語の *est* に対応するらしいという直観が容易にはたらくものと思われる。それぞれ英語 *is* は *be* 動詞の、そしてフランス語 *est* は動詞 *être* のいずれも直説法現在3人称単数形であって、「～である」を意味する繫辞(*copula*)である。ここで、4.1.2 で取りあげた諸言語に、古典語(ラテン語・ギリシア語・サンスクリット)を合わせて繫辞の直説法現在3人称単数形を示すと以下のようなになる。

《現代語》 (英語)(オランダ語)(ドイツ語)(フランス語)(スペイン語)(ポルトガル語)(イタリア語)

is is ist est es é è

《古典語》 (ラテン語)(ギリシア語)(サンスクリット)

est estí, ásti

繫辞の直説法現在3人称単数形が類似しているのは、インド・ヨーロッパ語族の言語に見られる特徴である。ラテン語 *est*、ギリシア語 *estí*、サンスクリット *ásti* の語形をもとに、比較言語学の手法によって再建されたインド・ヨーロッパ祖語(Proto-Indo European)の語形が **estí* である(寺澤 1997:740)。この事例は、インド・ヨーロッパ語族に属する諸言語において、ゲルマン語派とかイタリック語派という語派の壁を越えて、その根源の部分でのつながりを示す好例と言える。

4. 2. 6 “read” 考 [(1) vs.(2-a)]

本項では英文(1)に含まれる *read* とそれに対応するフランス文(2-a)の *lire* について触れておきたい。*read* 「読む」はゲルマン系の語であるので、語派の異なるフランス語 *lire* とは語形の上では何の関係もないように見える。ところで *read*

「読む」の意味上の関連語として英語には形容詞 legible 「読みやすい」という語がある。この英語の形容詞 legible 「読みやすい」はラテン語の動詞 legere 「読む」がそのもとになっており、両者に語幹 leg- が共通していることがわかる。一方フランス語の動詞 lire 「読む」も同じくラテン語の動詞 legere に由来するのである。つまり、英語の形容詞 legible もフランス語の動詞 lire もいずれもラテン語の動詞 legere に由来するのであるが、ラテン語とフランス語の間にはスペリングの差異が大きく、それだけを見ていてはなかなか気づきにくいと思われるため、ここでラテン語 legere と現代ロマンス諸語の対応関係を示しておくことにする。(小林 2019: 460)。

(ラテン語)	(イタリア語)	(フランス語)	(スペイン語)	(ポルトガル語)
legere	leggere	lire	leer	ler

このうち、イタリア語はロマンス諸語の中でも保守的で、この例ではラテン語の語形をほぼ継承していることがわかる。ただし、スペリングは類似していても、ラテン語から現代イタリア語に至るまでの間に音変化を経ているので、両者に音声上の差異はある。すなわち、ラテン語 legere の g は /g/ 音を表すのに対し、イタリア語 leggere の gg は /dʒ/ 音である。一方、フランス語はロマンス諸語の中で最も変化の度合いが激しいのでラテン語 legere から現代フランス語に至る過程で ge 部分が消失したために lire という語形になっているのである。

ところで英語 legible 「読みやすい」は、語形成の上では語幹 “leg-” + 接尾辞 “-ible” であり、「ラテン系」+「ラテン系」の組み合わせとなっている。英語にはまた類似の意味の形容詞 readable 「読むことができる・読んで面白い」がある。こちらは語幹 “read-” + 接尾辞 “-able” であり、「ゲルマン系」+「ラテン系」の組み合わせである。つまり、readable は 4.2.4 で触れた英語における「混種語」のもう一つの例ということになる。

4. 2. 7 “day” 考 [(1) vs.(2-a)]

本項では英文(1)に含まれる day とそれに対応するフランス文(2-a)の jour について触れておきたい。

英語の day は英語本来語であって、同じゲルマン語派であるドイツ語では Tag [ta:k] 「日」となるので、ドイツ語を学習している大学1年生であれば Guten Tag. 「こんにちは」という表現でおなじみの語である。一方で、(2-a)のフランス語の jour 「日」は、フランス語を少しでも知っている人であれば Bonjour! 「こんにちは

は」という表現でやはりこれもおなじみの語である。フランス語の *jour* はラテン語の *diurnus* 「一日の」に由来し、同じく *diēs* 「日」の関連語である。なお、英語の *day* とラテン語の *diēs* は語源的には一切無関係であると考えられている（寺澤 1997: 322）。

ところで、このフランス語 *jour* の意味がわかると、英語の *journal* と *journey* の語の理解が深まる。つまり、*journal* 「日誌・（日刊）新聞」の原義は「日々発行される刊行物」であり、*journey* 「旅行」の原義は「一日の行程」であり、いずれも「日」の意味を含んでいる。ここにも英語との関連性が見えてくる。この例からは、フランス語のごく初歩的な単語の知識があれば、勘を少しはたらかせることによって、英語の理解も深まるということが導き出される。「小学校英語」が大学1年生対象であつて、初修外国語（第二外国語）を学習している時期とちょうど重なることから、学生たちには、英語も初修外国語もともに関心をもって勉強いってほしいという願いを込めて、筆者はこの素材を授業で使用した。フランス語の例ではあるが、大学1年生向けの素材としては適例と思われる。

5. 結語

以上、本稿では、岩手大学教育学部で 2019 年度に筆者が担当した「小学校英語」において、「——素材は易しく、内容は深く——」をその中心的理念に据えて、実際に何をとりあげ、それをどのように授業展開をしたかについて、第1回講義「英語という言葉について」(令和元年10月3日(木)実施)を例にして論じてきた。

確かに、この第1回講義「英語という言葉について」で取りあげた内容のうち、そのままの形で小学校の授業の場面で使える素材は、たとえば、英語の数詞「1～10」、英語の月の名前「1月～12月」、単語としては“is”, “day”, “read”, “beautiful” などごくわずかであったかもしれない。それは筆者としては百も承知である。しかし、本稿で論じてきたように、筆者が意図したのはそこにあるのではなく、その背後にあつて、たとえ将来、学生たちが小学校の教室の授業場面で使うことがなくても、教養として知っておくとよい英語に関わる広くて深い知識、そしてさらにその先にある「それぞれの学問は奥が深い」という気づき——、授業をとおして筆者が伝えたかったのはまさにここにある。

筆者の第1回講義の終わりのところで学生たちを書いてもらったレスポンスカードには、筆者がまさに授業をとおして伝えたかったところをしっかりと受けとめて、綴られたものも何枚かあった。そのうちの一部をここに紹介したい。

「昔、小学校か中学校かどちらかの先生に、どうして(もともとは)「8」を意味する(のに)October が10月なのか、それらの関係を教わったことがありました。その(時の)経験と、今回の犬塚先生のお話から、小学校の先生になるには、小学生に教えるのよりも、もっともっと深く、広い知識・教養が必要であり、今まで自分が教わってきた先生方も、皆そのように多くの知識をもったうえで授業して下さっていたのだと実感しました。私も今後、より多くの知識を身につけていきたいです。」(心理学サブコース)

「小学校から英語を学習してきましたが、このような角度から英語について考えたことがなかったので、とても新鮮で興味深かったです。…(中略)…一番興味深いと思ったのは、ラテン語の7・8・9・10に英語の月を表すものが含まれていたことです。ラテン語は大昔の言語だと思っていましたが、現代の言語に通ずるものがあるとわかり、言語はつながっているのだと思いました。」(音楽サブコース)

「私は現在フランス語を履修しています。英語と似たスペルの単語だと感じたことがありますが、偶然だろうと思っていました。しかし今日、フランス語由来の英語の単語があることを知り、とてもおもしろいと思いました。英語を教えるにあたって、英語のルーツや他言語について知っていることで見方が変わらと思うので、とても貴重な機会になりました。」(教育学サブコース)

2019年度は、再課程認定を反映した新たなカリキュラムにおいて、教科専門として「小学校英語」という科目名で開講されることになったその最初の年であった。そのため、筆者としても講義の準備および授業展開においては試行錯誤的な面は多少あったし、いま振り返れば、改善すべき点もいろいろと思いあたる。来年度はさらに内容を充実させていきたいと考えている。

参考文献

- 朝倉季雄(2002)『新フランス文法事典』, 東京: 白水社.
市之瀬敦他(2020)『ポルトガル語文法総まとめ』, 東京: 白水社.
逸身喜一郎(2000)『ラテン語のはなし』, 東京: 大修館書店.
彌永史郎(2005)『ポルトガル語発音ハンドブック』, 東京: 大学書林.
彌永史郎(2011)『新版ポルトガル語四週間』, 東京: 大学書林.

- 大西英文 (1997) 『はじめてのラテン語』, 東京: 講談社.
- 風間喜代三 (1998) 『ラテン語とギリシア語』, 東京: 三省堂.
- 風間喜代三 (2005) 『ラテン語・その形と心』, 東京: 三省堂.
- 亀井孝他編 (1998) 『言語学大辞典セクション: ヨーロッパの言語』, 東京: 三省堂.
- 小林標 (2006) 『ラテン語の世界』, 東京: 中央公論新社.
- 小林標 (2019) 『ロマンスという言語』, 大阪: 大阪公立大学共同出版会.
- 坂本鉄男 (2009) 『現代イタリア文法』, 東京: 白水社.
- 桜井隆 (1986) 『エクスプレス オランダ語』, 東京: 白水社.
- 下宮忠雄他編 (1989) 『スタンダード英語語源辞典』, 東京: 大修館書店.
- 菅田茂昭 (2019) 『ロマンス言語学概論』, 東京: 早稲田大学出版部.
- 竹林滋 (1996) 『英語音声学』, 東京: 研究社.
- 田中秀央編 (1952) 『羅和辞典』, 東京: 研究社.
- 寺澤芳雄 (1997) 『英語語源辞典』, 東京: 研究社.
- 土居寛之 (1970) 『基礎フランス語研究』, 東京: 朝日出版社.
- 中尾俊夫他 (1988) 『図説英語史入門』, 東京: 大修館書店.
- 中山恒夫 (2007) 『古典ラテン語文典』, 東京: 白水社.
- 新倉俊一他 (1996) 『改訂版フランス語ハンドブック』, 東京: 白水社.
- ヘンチェル&ヴァイト (1994) 『現代ドイツ文法の解説』 (西本美彦他訳), 東京: 同学社.
- A. メイエ (1977) 『史的言語学における比較の方法』 (泉井久之助訳), 東京: みすず書房.
- 安井稔 (1987) 『英語学概論』, 東京: 開拓社.
- 山田善郎他 (1995) 『中級スペイン文法』, 東京: 白水社.
- Richard E. Prior & Joseph Wohlberg (2008). *501 Latin Verbs*. New York: Barron's.

(岩手大学教育学部英語教育科)